

# 山本半右衛門家の角筆文献について

鈴木 恵

一 はじめに

司馬遼太郎の長編小説「胡蝶の夢」にも登場する、佐渡郡真野町（新町）の山本半右衛門家・荏川文庫において、現御当主山本修巳氏の御厚意により、過日親しく角筆文献発掘調査をさせていただいた。僅か一日の調査につき、調査し得た文献には限りがあったが、幸いにも六本の角筆文献を発見することができたので、ここにその概要を記し、感謝の微意を表したい。

## 二 角筆文献について

角筆文献とは、従来ほとんど一般には知られていなかった、角筆（かくひつ）という先を尖らせた箸のような筆記具を使って紙面を凹ませ、文字や記号・図画などを記した文献の謂いである。小野篁を主人公とした王朝文学「篁物語」冒頭には、

○このをとこ、いとをかしきさまをみて、すこしなれゆくまゝに、かほをみえ、物語などとして、文のてといふものをとらせたりけるぞ、みれば、かくひちして、一首をなんかきたりける。

○かうをしふる中に、かくひちして、かやう初のみは、ひがごと

つかまつるらん。このころは物おぼえずぞや。

の如く、筆が腹違いの妹に対して「かくひち」（＝角筆）を用いて恋の歌を書く件があるが、これによっても平安朝の貴族達にとって、角筆が極めて日常・一般的な筆記具であったことが知られる。この状況は、意外にも鉛筆がポピュラーな筆記具となる明治時代まで続くのであるが、慣れないと簡単には見えないために、長い間文献を取り扱う専門家の鋭い目さえも免れてきた。しかも、その容易に見えないという性質は、必然的に記入者の清書意識・規範意識を和らげることに通じる如く、墨や朱などによるビジュアルな記入方法に比して、日常会話語や俗語・方言などが豊富に看取される、という特色があることが明かになるに従い、国語資料（史料）として次第に脚光を浴びるようになってきた。委細は、小林芳規著「中公新書・角筆のみちびく世界」、<sup>①</sup>「角筆文献の国語学的研究」、<sup>②</sup>「角筆文献目録」、<sup>③</sup>広島大学文学部角筆資料研究室のホームページ<sup>④</sup>などを参照されたい。

## 三 新潟県における角筆文献調査

新潟県における角筆文献調査は、九四年三月一四日から始まった、

新潟大学附属図書館佐野文庫所蔵角筆文献調査がその緒である。同文庫の調査は、その後も継続して実施されており、現在までに約一八〇点の角筆文献が発見されている。ちなみに、新潟県下角筆文献発見第一号は、筆者が調査初日に発見した「李氏易傳」(角筆文献台帳登録番号「一二三四」番)である。

佐野文庫調査の特徴は「悉皆調査」にある。悉皆調査は、単に角筆文献を発見するだけの目的に立つ場合には、無駄の多い極めて迂遠な作業と映るかもしれないが、どのような質の、どれほどの量の文献の中で、どれくらいの角筆文献が発見されるかという、当該文庫における角筆文献の位置づけを行う上では、極めて重要な調査と考えている。調査を終了した「漢籍之部」<sup>6)</sup>においては、全八三一点中六七点(八・〇六%)から角筆点が発見されており、特に子部(二三点)・集部(一六点)・史部(一六点)に角筆文献が集中していること、などが明かとなってきた。

また、新潟大学の外からも、九六年九月には大学近在の農家(新潟市尚和、当時教育学部学生宅)より、土地の境界線を示した江戸時代(宝暦・明和年間頃か)の絵図面一点から、その下絵線たる角筆の線刻が見つかり、同年一月には南蒲原郡下田村の漢学の里・諸橋轍次記念館の諸橋博士旧蔵の版本(漢籍類)から四点(その後今日までに二点追加)が発見され、九七年九月には教育学研究科の大学院生が、市内で開かれた骨董品市にて、角筆点が書き込まれた版本(漢籍)四点を発見・購入した(同学生は、九八年九月にも別の骨董品市にて、更に二点を発見・購入した)。更には、九七年度

から三ヶ年計画で始まった、文部省科学研究費補助金研究(基盤研究B-1)「西日本各地を対象とする角筆文献発掘調査研究と角筆文字解読用機器の開発研究」に伴う新潟県内調査によって、同年九月には県立佐渡高等学校八田文庫所蔵の版本(漢籍類)から六点、同二月には旧長岡藩校崇徳館・国漢学校の流れを汲む長岡市立阪之上小学校ふるさと教室所蔵の版本(漢籍・国書)から一三点の角筆文献が発見された。九八年度は、九月に佐渡郡真野町の山本半右衛門家から、次節に掲げる六点が発見されたのに続いて、一月には新潟県立文書館に所蔵される、西蒲原郡吉田町粟生津の鈴木家・瑞香堂文庫から四点の角筆文献が発見されている。

この他、研究代表者小林芳規博士(徳島文理大学教授、広島大学名誉教授)の許には、豊栄市の敬和学園高等学校教諭石川力氏(一四六三「易経」)や上越市の山田信亮氏(一七六一「古文真寶後集」)から角筆文献発見の報が伝えられている由であり、私の許にも、九七年に県教育庁文化行政課の竹田和夫氏から、中条町所有の「越後国奥山庄波月條絵図巻末建治三年四月二十八日沙弥道円讓状案等」(鎌倉時代写)に角筆らしき痕跡がある、との情報寄せられている。

かくの如く、新潟県下にはまだまだ多数の角筆文献が、人目に触れず、あるいはその目で見られることなく、埋もれていることが予想されるのである。是非とも多くの賛同者、発掘・調査協力者を得て、県内全域調査を行い、早急に角筆文献の現存状況を把握したいと切望するところである。

#### 四 山本半右衛門家の角筆文献

さて、山本半右衛門家・荏川文庫所蔵資料から発見された角筆文献は、次下の六資料である。各文献についての記事は、書名（外題を原則とする）に引き続いて、①登録された角筆文献番号、②頁数、③書写または板行年時、④装丁、⑤寸法、⑥表紙色、⑦郭の形態、⑧外題・内題・尾題・版心記、⑨刊記・奥書、⑩古印記、⑪伝来の書入、⑫訓点の内容、⑬発見者・調査者と発見・調査年月日、⑭の順に掲げてある。

『佐渡年代記』 ①「二六九六」②全三冊③江戸時代・慶長五年（一六〇〇）以降写か④袋綴装冊子本（明朝綴）⑤縦二二・六種×横一六・二種⑥薄茶色表紙⑦無郭⑧外題―佐渡年代記（原題簽あり）、内題・尾題・版心記―なし⑨慶長（丙申／十九年）／従大元（乙巳）至慶長五年庚子九百五十六年（序文による）⑩「抽榮堂山本氏藏書印」の朱印あり⑪「新穂村／羽田清」（万年筆書き紙片）、「佐渡年代記／嘉永四年辛亥 二十三冊」（墨書紙片）⑫漢字平仮名交じり文、墨（仮名・句切点・上欄注）、朱（訂正・圈点・上欄注・右傍注）、角筆（句切点・注示符）三三カ所⑬九八年九月二七日、菅谷内敷発見・調査

『撫筆小集』 ①「二六九七」②全一冊③江戸時代刊か④袋綴装冊子本（明朝綴）⑤縦二七・二種×横一八・四種⑥淡緑色表紙⑦単郭⑧外題・内題―撫筆小集（原題簽あり）、尾題・版心記―なし、⑨なし⑩「山本恒字子徳号雪亭」「家住小蓬菜」

の朱印あり⑪なし⑫箏の譜、墨（歌詞・譜・濁点符）、朱（書入・訂正）、白（訂正）、角筆（譜・注示符・合点か）約一〇カ所⑬九八年九月二七日、山本寛発見・調査

『蕃注蒙求』 ①「二六九八」②全三冊③江戸時代・文化十一年（二八一四）刊④袋綴装冊子本（明朝綴）⑤縦二六・四種×横一八・〇種⑥薄茶色表紙⑦単郭⑧外題―蕃注蒙求（原題簽あり）、内題―舊註蒙求、尾題―蒙求巻之下終、版心記―蒙求・考異下⑨文化十一年甲戌首春人日／佐渡矢島望謙識⑩「抽榮堂山本氏藏書印」「米亥」の朱印あり⑪「佐州五十里／勳風館出版」（墨書紙片・表紙貼付）⑫訓点附刻（少数の片仮名・返点・合符、句切点）、角筆（片仮名・返点・合符・名詞符）七八カ所⑬九八年九月二七日、鈴木恵・山本寛発見・調査

『新撰大日本永代節用無盡蔵』 ①「二六九九」②全二冊③江戸時代・文久四年（一八六四）刊④袋綴装冊子本（朝鮮綴）⑤縦二六・〇種×横一八・二種⑥黄色表紙⑦単郭⑧外題―新撰大日本永代節用無盡蔵（原題簽あり）、内題・尾題―なし、版心記―増字永代節用⑨寛延三年庚午元刻／天保二年辛卯新刻／嘉永二年己酉再刻／文久四年甲子四刻（以下略）⑩「抽榮堂山本氏藏書印」の朱印あり⑪なし⑫辞書、訓点附刻（片仮名・平仮名・句切点・返点・上欄注）、角筆（片仮名・漢字・注示符・図絵中の補助線か）一三カ所⑬九八年九月二七日、鈴木恵発見、菅谷内敷・山本寛調査

『赤穂義人録』 ①「二七〇〇」②全一冊③江戸時代・元禄十六年（一七〇三）以降刊か④袋綴装冊子本（朝鮮綴）⑤縦二

七・二櫃×横一九・四櫃⑥薄茶色表紙⑦単郭⑧外題・内題―赤穂義人録（原題簽あり）、尾題―赤穂義人録終、版心記―なし  
 ⑨日東元禄癸未十月庚辰鳩巢室直清手書／於静儉齋（序文による）⑩佐州／新町／美澤堂」の黒印あり⑪「山本氏／恒蔵」（墨書・裏表紙見返）⑫朱（句切点・右傍注）、角筆（句切線・右傍線）四カ所⑬九八年九月二七日、菅谷内敷発見・調査「箏曲大意抄」⑭「二七〇二」⑮全六冊⑯江戸時代・寛政四年（二七九二）刊⑰袋綴装冊子本（朝鮮綴）⑱縦二七・二櫃×横一八・六櫃⑲青緑色表紙⑳単郭㉑外題・内題―箏曲大意抄（原題簽あり）、尾題・版心記―なし⑳「壬子新刻全部六冊」（刻字・第一冊扉上部）㉒「拙榮堂山本氏藏書印」「雪亭」の朱印あり㉓「三宅多喜江」（墨書・第一冊1才余白）㉔第一冊―五冊―箏の譜、訓点附刻（上欄注）、第六冊―漢文体部分・訓点附刻（仮名・返点・合符）、仮名文部分・訓点附刻なし、角筆（譜・注示符か）約二〇カ所㉕九八年九月二七日、山本寛発見・調査

このほか、「東湖隨筆」「諸役人分限撰」「女用訓蒙圖彙」の三資料に角筆様の凹みが発見されたが、未だ認定されるに至っていない。

右山本半右衛門家発見の角筆文献に特筆される点は、その所蔵印や墨書書入、想定される購入年代や使用年代、書籍の内容などから、その何れもが、恐らく山本家の人物によって愛読・愛用されたと考えられることである。すなわち、龜田鵬齋の手になる「舊注蒙求」は、刊行年時や書籍の内容などから、漢籍をよくした山本家第六世子温に関係するものであり、また「佐渡年代記」「新撰大日本

永代節用無盡蔵」は刊行年時や墨書書入の年記から、「赤穂義人録」は「山本氏／恒蔵」の墨書書入から、「撫箏小集」「箏曲大意抄」は「山本恒字子徳号雪亭」「雪亭」の朱印から、それぞれ第八世雪亭に関係する本であることが知られるのである。就中「撫箏小集」「箏曲大意抄」は、囲碁・書と並んで箏の琴を愛したと言われる雪亭その人が、墨や朱にて歌詞や譜を書き入れる一方で、角筆をも用いて譜や注示符を記入したのであることは、想像に難くないのである。

一般に、角筆点は誰人が記入したのか、特定しにくいという難点がある。これは、角筆で奥書・識語が記されることが殆どない、というのが最大の理由である。従って、次善の策として、同一文献に記入された朱墨の書入（特に人名）などから、角筆点の記入者を推測せざるを得ないのが通常である。同様に、山本家の角筆文献にも、角筆による奥書・識語の類は全く存しない。しかし、この家が何世代にも亘って好字の士を輩出し続け、それぞれが書籍を愛蔵して、貴重な書籍が家の外に流出するのを懸命に防いだこと、尚かつ第十世山本半蔵が所謂「佐渡山本半右衛門家年代記」を編集して、慶長一九年（一六一四）から明治一六年（一八八三）に及ぶ山本家約二七〇年の歴史を、事細かに再現できるようになっていたことによつて、角筆点の記入者をおおよそ特定することが可能なのである。これは、正に山本家角筆文献の、他に優れた点と言うことができる。ちなみに、新潟大学附属図書館佐野文庫には膨大な図書が蔵されており、角筆文献も亦約一八〇点の多きが発見されていることは前述したところであるが、この中で角筆の記入者までほぼ特定で

きるものは、極く僅少なのである。

## 五 『舊注蒙求』の角筆点

前節に述べた如く、山本半右衛門家発見の角筆文献は、今のところ総て第六世子温・第八世雪亭に関わるものと推定できるものであった。とりわけ雪亭に関わるものが六点中五点を占めた。しかし、角筆による文字（仮名・漢字）を有するものは僅かに「新撰大日本永代節用無盡蔵」一点に過ぎず、残念ながらそれも確例とは言い難い。そこで、本節では計七八カ所に角筆による訓点を取取される、唯一第六世子温に関係する角筆文献と見られる『舊注蒙求』を取り上げ、訓点の内容について少々詳しく述べてみたい。

『舊注蒙求』は、諸版本に「鵬齋先生閔」とある如く、江戸の折衷学派の学者亀田鵬齋の校閲にかかり、初版は寛政二年（一八〇〇）の発刊であることが知られる。その後、和泉屋庄二郎版が文化一二年（一八一四）に刊行されたが、山本家に蔵せられる勳風館蔵版にも、刊記に「文化十一年甲戌首春人日／佐渡矢島望謹識」とあるところから、同じく文化一一年に、鵬齋の門人である佐和田町五十里・勳風館の矢島望が出版したものと考えられる。ただ、池田利夫氏は静嘉堂文庫蔵本の解題において、この勳風館蔵版についても触れ、「刊年は不明ながら更に後れて見返しと跋とを改刻」したものとされている。今は、ひとまず文化一一年、あるいはそれからさほど隔たらない時期に刊行されたものとしておきたい。

ところで、亀田鵬齋は文化七年（一八一〇）佐渡に来訪し、百日

余り滞在する間に、弟子の矢島望宅を中心に島内各地に赴いたとい<sup>①</sup>う。先述の「佐渡山本半右衛門家年代記」にも、

〇一、七月、江戸之大儒亀田鵬齋先生来訪、両三日逗留講義をなす。（文化七庚午年の条、同書一三六頁）

とある如く、山本子温宅にも二、三日逗留して、講義を行うことがあったようである。この時もし『舊注蒙求』に関する講義がなされたと仮定しても、勳風館蔵版『舊注蒙求』は未だ出版されていないわけであるから、その講義は当然寛政初版本系のテキストに基づいてなされたであろうし、従って山本家の『舊注蒙求』の角筆点がこの時、すなわち鵬齋の講義を聞きながら、その訓説に従ってリアルタイムで記入されたということは、残念ながら全くあり得ないことである。しかし、その後勳風館蔵版が出版され、それを手にした時、胸中に脳裏に深く刻み込まれたその折の講義の内容は彷彿とよみがえり、想い出すままにその一部を角筆にて書き込んだという可能性は、必ずしも否定できないのである。

なお、『舊注蒙求』の寛政初版本系の本文と勳風館蔵版（山本家蔵本）の本文とを、詳しく対校する必要があるのであるが、現時点では準備不足によって未だ行い得ていない。ただ、今試みに寛政初版本系として、狩谷校齋手次本である静嘉堂文庫蔵本を取り上げ、これと山本家蔵本の調査、特に角筆記入部分の抄出本文とを比較してみると、上・中・下巻の丁数はそれぞれ七四丁・五四丁・五一丁と等しく、また行取り・字詰めも同じであることが知られる。従って、正に池田氏の解題の如く、表紙見返し扉部分と跋文とを改刻する以外は、全くの同文ではないかと推測される。唯一相違があ

るとすれば、静嘉堂文庫蔵本は句切点が附刻されるだけの白文<sup>⑫</sup>であるのに対して、山本家蔵本にはそれ以外にも上巻に極く僅少の片仮名ルビ・返点・合符の附刻が存する点である。

さて、山本家蔵「舊注蒙求」に加点された、角筆による訓点の実際は次下に掲げる通りである。なお、前掲の調書においては、本資料の角筆施点箇所を全部で七八カ所としたが、以下の記述では便宜的にこれを訓点の種類ごとに細分したため、合計が九九例となっている。すなわち、

①天子大臣將<sup>レ</sup>營<sup>レ</sup>舟楫<sup>一</sup>。(上8オ2、句切点は附刻、それ以外の訓点は特に断らない限り総て角筆点、以下同)  
の如き用例は、一連の訓点と見て一カ所としてカウントしたが、訓点の種類は返点のレ点と一・二点、合符、の都合三種類となるためである。

I、片仮名によるもの……三三例

A、和訓

ア、全音節加点……一例

ツナク

②主信讓<sup>レ</sup>而係<sup>レ</sup>之。(上25オ2、「係」字右傍の大字「ツナク」)

イ、語頭二音節加点……一例

③主簿<sup>ヲ</sup>餉<sup>ル</sup>魚。(上19ウ6、「ヲク(ル)」か)

ウ、最終音節加点(助詞を含む)……一七例

④獸<sup>シ</sup>微<sup>シ</sup>弩<sup>シ</sup>強。(上14ウ6、「ヨワク」シテ「オホユ」ミ)か)

⑤實<sup>ニ</sup>稟<sup>ニ</sup>生<sup>ル</sup>靈<sup>ニ</sup>秀。(上16オ2、「マコト」ニ)か)

⑥漢<sup>ニ</sup>末<sup>ニ</sup>從<sup>テ</sup>叔<sup>ニ</sup>父<sup>ニ</sup>玄<sup>ニ</sup>徃<sup>ル</sup>襄<sup>ニ</sup>州。(上1ウ4、「シタガ」テ)か)

助詞は、格助詞「ト」一例、「ニ」三例、「ノ」三例、係助詞「ハ」二例、接続助詞「テ」(シテを含む)三例、合計五種二例である。

B、字音

ア、全音節加点……八例

⑦吳楚<sup>ノ</sup>反<sup>ル</sup>時。(上8ウ2、「ハン」)

⑧仲舉<sup>ノ</sup>強<sup>ク</sup>於<sup>テ</sup>犯<sup>ル</sup>上。(上36ウ3、「ハン」)

イ、語頭音節加点……五例

⑨六<sup>ノ</sup>船。(上2オ3、「ト(ウ)」か)

⑩豈<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>塵<sup>ニ</sup>乎。(上23ウ5、「塵」字左傍、「テ(イ)」か)

II、漢字によるもの……一例

ア、同音字注

⑪于<sup>レ</sup>時<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>南<sup>ノ</sup>府<sup>ノ</sup>廳<sup>ノ</sup>事<sup>ノ</sup>壁<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>角<sup>ノ</sup>頭<sup>ノ</sup>弓。(上36オ3、「廳」字左傍の「丁」本例の返点・合符は附刻)

丁

III、符号によるもの……六二例

ア、返点……四〇例

用例①⑤⑥参照。レ点(九例)、一・二点(二三例)、一・二・三点(三例)のほか、一点のみのもの(五例)、二点のみのもの(一例)が看取された。

イ、句切線……四例

⑫爲<sup>レ</sup>蘭<sup>ノ</sup>臺<sup>ノ</sup>令<sup>レ</sup>史。(上7オ5、句切点直下の横線)

ウ、合符(人名符などを含む)……一八例

用例①⑦参照。中央線(二例)、右傍線(三例)、左傍線(四

例)が見受けられるが、特に音読・訓読の区別はなされていない。  
IV、未詳のもの……四例

右掲の如く、全九九例の内訳は、片仮名によるもの三二例(三二・三%)、漢字によるもの一例(一%)、但し同音字注のみ)、符号によるもの六二例(六一・六%)、未詳のもの四例(四・一%)であって、返点・合符・句切線を中心に据え、これに仮名点(和訓・字音)を交えるという、漢文体本文への加点的状況としては、極めてオーソドックスなものであることが分かった。加点了な内容は概ね正確なのであるが、

⑩何謂門人曰。易已東矣。(上3オ3、レ点は不要)

⑪皆連手<sup>エ</sup>繋<sup>エ</sup>續<sup>エ</sup>之。(上13オ5、本行上欄に「ケ」あり、「□ウ」を「ケウ」に訂正したものとされるが、本来は「ネウ」、右傍は「エ(イ)か」)

⑫前漢千定國字曼備。(上24オ5、助詞「ニ」は不要)のような誤点が九例(和訓四例、字音一例、返点四例)、また仮名字音点に、訛音と思しき用例(次の一例のみ)が看取された。

⑬後漢嚴光字子陵。(下32オ7、「ロ(ウ)」は本来「リヨウ」か)このほか、附刻された訓点に、重ねて角筆点を記入したものが全四例拾われた。<sup>1)</sup>

⑭香樂<sup>ノ</sup>廣字<sup>ノ</sup>彦<sup>ノ</sup>輔。(上36オ1、本例の助詞「ノ」「ハ」・合符は附刻 両助詞、「樂」字直下の合符に角筆点重書)

六 むすびにかえて

以上、山本半右衛門家・荏川文庫発見の角筆文献について述べた。

その特徴は既述の通りである。角筆点の詳細については、比較的多くの訓点が看取された「舊注蒙求」を取り上げ、その記入者を六世子温と見立てて、分析・検討を行ったわけであるが、この他には子温に関わる角筆文献は発見されていないため、その状況が果たして子温一般の加点的実態か否か、判断する材料がない。今後、子温の手に掛かる角筆文献を発見すべく調査を継続する一方で、墨や朱など通常の筆記具による子温の著作を見つけ出し、これを綿密に分析することも必要となるだろう。総ては後致に俟ちたい。

なお、山本修巳氏は、この三月末日を以て県立佐渡高等学校を最後に、長きに亘る教員生活に別れを告げられる。御退職後は、御蔵の整理なども御計画とのことである。願わくば、極く近い将来に御蔵の片隅の文箱の中などから、六世子温や八世雪亭が使用した角筆そのものが発見されることを、大いに有り得べきこととして期待している。

[注]

(1) 一九九八年九月二七日(月)、午前九時半から午後七時まで  
の長きに亘って調査させていただいた。

(2) 八九年一月、中央公論社刊。

(3) 八七年七月、汲古書院刊。

(4) 一九九一〜九七年版、九二年五月から毎年五月に発行。

(5) <http://eizalett.hiroshima-u.ac.jp/~kakuhitu/>

(6) 拙稿「新潟大学附属図書館佐野文庫蔵角筆文献目録(上)―漢籍之部―」(新潟大学教育学部紀要第三九巻二号、九八年

三月) 参照。

(7) 山本修之助編「佐渡叢書第七巻・佐渡山本半右衛門家年代記」(七五年一〇月、佐渡叢書刊行会)。

(8) 池田利夫「蒙求古註集成 中巻」(八九年一月、汲古書院)。影印の静嘉堂文庫蔵本の扉・内題左傍に、「庚申之春漢皇堂蔵」とある。

(9) 池田利夫「蒙求古註集成 下巻」(八九年九月)の解題による。

(10) 山本修之助「亀田鵬斎の佐渡人宛書簡(一)(二)(三)」(佐渡史学第一集、五九年一月、同二集、六〇年一〇月、同三・四集合併号、六二年八月)、山本修巳「佐渡の漢学と山本家」(注7文献、三五三頁)参照。なお、山本修之助論文は、近藤春雄「日本漢文学大事典」(八五年、明治書院)の「かめだほうさい」の項に、参考文献として佐渡史学第三・四集合併号掲載のもののみが掲げられているが、タイトルは単に「亀田鵬斎」とされている。辞典(事典)が、先学の知見の集積の上に立ち、後学の者に学の方角性を示唆するといふ、重要な使命を帯びているものであるとしたならば、余りにも杜撰な引用と言えるのではないだろうか。

(11) 注8文献の影印による。

(12) 静嘉堂文庫蔵本上巻22丁表3行目に、「孫<sup>そん</sup>才<sup>さい</sup>冠<sup>くわん</sup>」の如くにルビが一例拾われるが、これが墨書であるのか、それとも附刻されたものであるのか、写真版につき判別が困難である。ただ、これが唯一のルビらしきものであることを考えると、おそらく墨書の如くに推察される。

(13) 四例の内訳は、用例⑦に掲げた三例と、用例⑧中の「有」字直下の返点(二点)一例である。但し、この二点は附刻の二点の、何故か二画目のみに重書する。

#### 〔附記〕

山本半右衛門家においては、御多用の中にも関わらず現御当主山本修巳氏から、昼食・茶菓の御馳走を始めとして、有益なお話を伺い、貴重な諸資料を頂戴するなど、御尽力・御協力を忝うした。深甚の謝意を表するものである。また、本調査には、新潟大学大学院教育学研究科学生、菅谷内敦・山本寛・富澤綾児三氏の献身的な助力を得、文部省科学研究費補助金の交付を受けることができた。改めて深謝申し上げる次第である。本文中にも触れたところであるが、僅か一日の調査であったため、推測の域を出ない部分があり、また不備や失考も少なくないものと思われる。大方の御批正をお願い申し上げます。改訂の次第である。

本稿第二節と三節は、新潟大学附属図書館報「新潟大学図書館だより」第八三号(九九年一月)掲載の拙文「佐野文庫と角筆文献調査」と、内容的に重なる部分が大きいことを付記しておく。

なお、本稿は山本修巳氏の御厚情に応えるべく、早期の成稿を目指して執筆を始め、昨年中にはおよその完成を見ていたのであるが、その後公私の雑事に忙殺され、また前掲「新潟大学図書館だより」の発行を待つうちに、調査から早五ヶ月を歴ることとなった。御寛恕の程、切に願ひ上げ奉る。——一九九九年二月二〇日成稿——

(新潟大学教育人間科学部助教)